



ヨミトリとヨミトリ君で 一緒にしましょ！(14)

高木久美子

意識があるのに、わかっているのに、言葉を発しているのにそれが伝わらないことについて、どう向き合い、取り組んでいくかということは、人の尊厳に関わる大切なことです。心と技能と技術を繋ぎ、障害のある方のコミュニケーション支援・レクリエーションの楽しい機会の提供を目指して非営利で活動しています。活動を通して学んだこと、感じたことなどを書いていきます。

「新たなフェーズへ」

この「ヨミトリとヨミトリ君で一緒にしましょ！」連載投稿の上記の投稿への思いの中で、これまで「技術と技能を心で繋ぎ」と書いてきた部分を本号から「心と技能と技術を繋ぎ」とあらためました。
2021年にヨミトリ君プロジェクトを立ち上げた時に、

技術と技能を心で繋ぎ
心を技術と技能で繋ぎ

と、どれを最初に持ってくるか、目的語にするか、あるいは手段にするかずいぶん悩みました。ヨミトリ君プロジェクトが今年5年目に入り、介助付きコミュニケーション「指筆談」のヨミトリによる技能もヨミトリ君の技術もそれぞれに切磋琢磨し、一定の上達・進化を遂げてきたと自負するところではありますが、特に私自身にとっては、指筆談の技能が向上するにつれ、心の領域、まだよく知られていない遷延性意識障害や閉じ込め症候群の状態におられる当事者の方々の思い、感情、思考の深遠さ、広大さ、時には神秘ともいえるその不思議な力に驚嘆し心を揺さぶられる場面が増え、もっともっと当事者の方々と交流し、協力していただきながら、多くの方にその未知の豊かな心の世界を知っていただき共に学び合いたいと思うようになりました。

特に前号の投稿からのこの3か月は、まるで何かの采配を受けたようにそのテーマに関連する体験が続きました。今号ではそのいくつかをご紹介します、寝たきりで身体を動かすことも話すこともできず目視では覚醒を確認することはできなくても、意識や心の声、言葉は確かにあり、私たちはそれを知り共感することができることを知っていただければ嬉しく思います。

■躍動する心

8月に古くからの友人Aさんと連絡を取り合うと、認知症の症状の出ていた高齢のお母さんが、夏の酷暑がこたえたのか衰弱が一気に進み、寝たきりになって体がまったく動かず話すこともできなくなってしまう、主治医の先生からは看取り期に入ったと言われたとのこと。手を握ると時々握り返してくれるけれども、どのぐらいわかっているのかわからないとのことでした。

遊びに行くといつも温かく迎えてくれて、得意の料理やお菓子をふるまってくださったAさんのお母さん。指筆談による介助で意思疎通できるかもという思いと、子どもの頃から可愛がってくださったお礼をぜひ直接お伝えしたいという思いで、お訪ねさせていただくことになりました。

ただ、お体が動かなくなる前に認知症の症状があったということで、指の動きを読み取ることはできたとしても、果たして意味のあるやり取りが可能か、不安がありました。少し緊張しつつ、お部屋のベッドのところに行って顔を拝見すると…。これまで12年余、意思疎通のトライをさせて来ていただいています、わかるのですよね、意識があるということが。早速久しぶりのご挨拶と、指筆談のやり方を簡単に説明し、手を取らせていただいて○と×を書いてみていただくと、しっかりと○と×を書かれました。こちらの言うことがちゃんと聞こえているし、理解しているということです。そしてその通りに書けています。私は横で固唾をのんで見ていたAさんと同席されたAさんのお兄さんに向かって「ばっちりです。いけそうです！」と伝えました。

「え、書けてるの？」Aさんは驚きつつも嬉しそうです。

お母さんに「○と×しっかり書いてくださってありがとうございます。続けてなにか文字を書いていたきたいのですが、ひらがなでお願いできますか」と、お伝えしている間に、即座にちゃんとその通りひらがなで、一気に書き始められたのです。

ここでは、漢字混じり文にします。

「久美ちゃん(高木)、来てくれてありがとう。まさかこんなふうにもた書いて言葉を伝えることができるなんて信じられないです。とてもうれしい」とお母さん。

「おばさん、すごいです。Aちゃんとお兄さんに何か言ってあげてください」

Aさんとお兄さんぐっと身を乗り出して、お母さんの方に顔を寄せました。

「ここでいろいろ相談しないで」

「え…」

「ぜんぶ聞こえてるし、わかってるから。ここでみんなでいろいろ相談しないでちょうだい。」

「…」

Aさんもお兄さんも固まってしまって声が出ません。

うーん、子どもの頃から、すごく気さくで話しやすいお母さんだったけど、言う事はちゃんとはっきり言う、私の知っているAさんのお母さんそのままだ。それにしても、認知症と聞いていたけど、認知症はどこへ行った？！

「それからA子」

「…」

「A子、聞いてる？」

Aさんははっと我に返り、「何？お母さん」と答えました。

「あなた、声がすごく大きくてうるさくてたまらないの。もっと小さな声で話してちょうだい」

Aさん、ついさっきまでお母さんに意識があるかどうかと思っていたことを忘れたように、言い返しました。

「え、だってお母さん、耳がすごく遠くなってて、お母さーん！って近くで大きな声で叫ばないと聞こえなかったじゃない」

「大きい。もっと小さな声で」

「こう？」

「まだ大きい。」

「どう？」

「もっと小さく」

「えー、これで聞こえるの？えー？」

なんだかいつもの小さな親子げんかがそのまま再現されているような様相です。思わず笑ってしまいそうになりましたが、真剣勝負の場の空気を紛らわそうと、割って入って言ってみました。

「実は多くの当事者の方が『話しかけられる声が大きすぎて困る』と言われるんですよ。お体が動かない分感覚が鋭敏になられるのでしょうかね」

「そうなんですね」と、じっと黙ってやり取りを見ておられた温厚な人柄のお兄さんが合いの手を入れてくださいました。

「それからA子」お母さんは復活を楽しまれるかのごとくどんどん書かれます。「その『おかーさーん、あーの一ねー』っていかにも年寄りに話すみたいな変な話し方もやめてね。普通に話してちょうだい。普通に」

「聞こえないと思うから、聞き取りやすいようにわざわざゆっくり区切って言っていたのに、もう。だけど今日久美ちゃんが来てくれて本当によかった」

「私もお話しできてうれしいわ」

「いや、昨日実はCDかけてたの。わかってるかわかっていないかわからないじゃない。元気出してもらおうと思って、行進曲を集めたCD。」

「あー行進曲。賑やかなやつね(苦笑)」

「そう、景気付けに。しかも大音量で。私がいる間、一日…。」

あちゃー。「それはたいへんでしたね」と、思わずお母さんに話しかけました。お母さん、ゆっくりと書かれました。

「あれは、つらかった」

お気の毒なのですが、お兄さんも私もつい笑ってしまいました。

「だけど、元気を出してもらおうと思って一緒に懸命曲を選んでCDにまとめたんだから。時間かかったんだからね」とお母さんにまた言い返すAさんも子供のようなかawaiiらしさ。

何気ない母と娘の会話。お母さんが自然体で話すように書いてくださることもよかったですが、Aさんとお兄さんが最初は驚かれたもののありのままに受け入れてくださり、普通に自然に会話をしてくださったことが私は本当にうれしかったです。

お母さんは、お子さんやお孫さん達の健康や多忙を気遣い、親しい方々へのメッセージ、ご自身のこれまでの人生のこと等、いろいろ話してくださいました。私も、可愛がってくださったことへのお礼を直接伝えることができてよかった。

その後、お母さんに少し休んでいただくことにして、Aさんと私は別の部屋に移動。お互いの近況など話しました。意思疎通支援の活動のことも詳しく話すのは初めてで、Aさんはいろいろ熱心に聴いてくれました。

そして、しばらくしてお母さんのお部屋に戻ると、先ず言われたのが「A子とあんな風に話しているのね。楽しそうで、なんだかうれしかったわ」でした。驚きました。

「え、おばさん、私たちの話しているの聞こえたんですか。」

「聞こえた。聞こえるのよ。ものすごくよく聞こえるの」

あり得ない…。私たちが話していた部屋はお母さんの部屋と反対側の廊下の一番奥で、お母さんの部屋も私たちがいた部屋もドアは閉めてあり、話し声もひそひそ声ではないもののボリュームはかなり落としていたからです。

しばらくしてヘルパーさんが来られました。会釈して静かに入って来られたのですが、お母さんがささず私に指筆談で「とても上手で親切なヘルパーさん。お礼を言いたいと思っていたの。久美ちゃんがいてくれてよかったわ。伝えて」と書かれました。私は一字ずつ書かれるまま読み上げました。Aさんがまた驚いて

「お母さん、誰が入って来たか見えたの？目もすごく見えにくくなっていたじゃない？見えるの？」と言いました。

「そうなの、見えるのよ。」

ケアが終わるのを待って、私は思わず尋ねました。

「おばさん、ものすごくよく聞こえるし、目も見えるんですね。どんな感じで見えるというか、聞こえる

んですか」

「耳で聞いているし、目で見ているのだけれど、それだけじゃなくて、なんていうか、身体全体で見たり聞いたりしている感じ。上手く言えないけど」

対話支援で訪問して、当事者の方々がよく言われる「すごくよく聞こえる」という感じも、この身体全体の感覚によるものなのだろうか。でも身体全体で聞く、聞こえるって…。不思議です。

Aさんのお母さんはその日指筆談での対話を始めてかなり早い段階で、「こんなふうに話ができて本当にうれしいけれど、でも久美ちゃんが帰ってしまうと言葉を伝えられなくなるから、それはとてもつらい気がする。でもやっぱり思いを伝えられるのは本当にありがたいので、忙しいでしょうけれどまた来てちょうだい。お願いね」と言われました。

「言葉が再び届いた喜びと、再び伝えられたが故に感じる介助者不在時の伝えられない一層のもどかしさ」という意思疎通支援の課題もすぐに理解され、家族や親しい人たちそれぞれの健康や多忙を案じ、ヘルパーさんに感謝を伝え、そして私にも「とても大切な活動だから、がんばって続けてね」と励ましてくださったお母さん。

その後再度お訪ねした際は、「私も話したい」とご親族の方々が私の来訪に合わせて来られ、お母さんはとても喜ばれました。一緒に笑ったり、泣いたりしながら皆さんが当たり前のように自然にお母さんのお話を聞かれ、お母さんに話しかけるご様子を拝見しながら本当に温かいファミリーだと、私も愛を分けていただいたようなうれしい気持ちになりました。

Aさんのお母さんはその後まもなく亡くなりました。Aさんには「久美ちゃんのおかげで会話ができたこと、奇跡のように思います。本当にありがとう」と言ってもらい、Aさんのお兄さんからも「おかげで最期に濃いコミュニケーションを取ることができて本当に良かったです。ありがとうございました」とメッセージの伝言を受けました。お身体はまったく動かせず、言葉を発することもできませんでしたが、お母さんはすべてわかっておられて、そのお心は躍動し、愛があふれていました。大切な方々への思いを言葉で伝えるお手伝いができてよかったです。

一方、反省すべき点もあります。國學院大學の柴田先生のきんこんの会で行動障害の当事者の方々と指筆談でお話して、その知識の豊かさや人間的内面の深さを知り、表出される行動とのギャップにご本人達が一番つらい思いをされているということを私は知る機会を持っていたのに、Aさんのお母さんが認知症と聞いて、認知症では意思疎通は難しいのではと一瞬でも懷疑的になってしまったことです。認知症はどこへ行ったのかという謎は置いておいて、今後は機会があれば、認知症から言葉を失ってしまった方の意思疎通支援にもトライしていきたいと思いました。

Aさんのお母さん、再会と対話は私にとって今後の支援に大きな学びとなりました。今までのすべてに感謝します。ありがとうございました。

■対人援助学会第17回年次大会に参加しました

実は、今後はこの遷延性意識障害、閉じ込め症候群の状態の方々の常人を超える感覚の凄さを皆さんに知っていただこうと思ったきっかけが今年の学会の初日に行われた対人援助学マガジン情報交換会

でした！

その前に、恒例となりました大会参加記、印象に残ったことを書きます。

いろいろ嬉しいこと、参考になったこと、素敵な人々との出会い・再会がまたありました。

先ず一番に、会場となった大阪キリスト教短期大学の守衛さんです。閑静な住宅街を通り抜け大学キャンパスに到着し、会場の案内をしてくださった守衛さんが本当に素敵なお方でした。初老の紳士。静かな雰囲気でしたが学会関係者の来訪を温かく歓迎してくださっていることが伝わってきました。大学の品格と合っているというか、最初に言葉を交わす関係者の方が良い方だと大学のイメージも一気に上がります。なんとなくお姿を拝見したくて、2つに分かれていた会場を行き来する際は必ず守衛室の前を通り、それとなく中をうかがい…。完全に不審者です。不審者の取り締まりは守衛さんの任務の一つです。自らお仕事増やしてどうする、高木…。こうやって書いていてもお懐かしく思い出します。今日も静かに守衛室におられ、温かく丁寧に来訪者に接しておられることでしょう。私もこういう姿勢で意思疎通支援の活動に臨みたい。がんばります。

ヨミトリ君は、システムエンジニアの岡田さんが新潟、広島、京都、そして今回の大阪大会と4年連続でポスター発表1番をゲットし(常にやる気満々です)、満を持して最新のヨミトリ君の入力装置を展示、公開しました。社会学系の発表が多い中、ヨミトリ君のポスター掲示の前には毎年お借りするテーブルにヨミトリ君の機材、操作用パソコン複数台を並べ工学色が全面に。しかし、ヨミトリ君に触っていただきながらのご来訪者の方々とのお話は人の尊厳、意識、愛、福祉、リハビリ、支援の事等、心のふれ合いを通してのとても温かく時に熱い交流と情報交換の素晴らしい場となりました。

今回初日の一番に来てくださった方は、親しいご友人のご家族が遷延性意識障害であるとのこと。意識があるのかどうかわからない状態で、為す術がないとご友人が苦悩しておられるとのことなので、ヨミトリ君で多くの当事者の方が意思を表示したり、ゲームを楽しんだりされていること、全国に遷延性意識障害者の家族会があり共に支え合っていることなどをご紹介させていただきました。とても驚かれ、「希望が持てます。友人に伝えます」と喜んでくださいました。

熱心にヨミトリ君の説明や指筆談での意思疎通の活動のことを聞いてくださった女性は、脳卒中の後遺症者であるとのこと。発症後に数々の資格を取られ、現在専門職としてお仕事をしておられるとお聞きし、すごいなーと思いました。また、なんと前号の投稿で書いた名古屋の脳卒中後遺症者のいきがづくり NPO法人ドリームをご存知とのこと。脳卒中の当事者がマスター、ママを務める喫茶ドリームに一度行ってみたいと思っていましたとうれしいお言葉をいただきました。

週が開けて、ドリームで「対人援助学会の大会で大阪に行ったら、脳卒中後遺症の方がヨミトリ君を見に来られて親しくお話ししました。お名刺いただいて来ました」と所長に見せると「存じ上げております」と！いろいろ繋がりがあってうれしくなりました。

大会の基調講演、ワークショップも新たに知ること、学ぶことが多く、今後の意思疎通支援の活動の大きな学びになりました。大会事務局の先生方、大阪キリスト教短大のボランティアの学生さん、たいへんお世話になりました。ありがとうございました。

追記。ヨミトリ君の岡田さんと衝撃の発見です。「他の人のポスター、布製のがありますね。」こっそりあちこち触ったりしてみて(触ってないで中身を拝見しろ)、布の種類もいろいろあることがわかりました。折れるしシワにならないみたいだし、うーん、次は布製か。学会は本当に学びが多いなー。

■対人援助学マガジン交流会

大会では学会の会員さんで心理カウンセラーのBさんと毎年お会いするのがとても楽しみです。意思疎通支援のお仕事もされているので、お話しするといつもヨミトリ君や指筆談の活動に良い気づきや助言をくださってとてもありがたく思っています。

今回とても楽しみにしていた大会初日の最終プログラム「対人援助学マガジン執筆者&読者&未来の読者 情報交換会！」にBさんも参加され、同じテーブルになりました。同テーブルの他のご参加の方とも親しくお話しすることができたのですが、これもBさんが気さくでお話し上手なので、自然に会話が盛り上がったおかげでした。

「マガジン 3 か月に 1 回ってけっこう早く締め切りが来るでしょう。書くことがなくて困るとかはないんですか。」とBさん。

「3 ヶ月の間に本当にいろいろなことがあるので、毎回書きたいことはたくさんあるんです。その中からどれを書こうかなという感じで」

「そうなんですか」

「書きたいけど書けないこともあって…。あ、これは次号に書こうと思っているのでここでも」と、友人Aさんのお母さんとの意思疎通のエピソードを少しお話ししてみました。よく聞こえない、見えないはずのお母さんが実はものすごくよく聞こえ、見えていたことに皆さんとても驚かれました。

ところで、当事者の方々の感覚がすごいと思うのは、実は他にもいろいろエピソードがあります。ある当事者の方は私のこともよくわかってくださっていて、

「去年体調がとても悪い時がありましたよね。高木さんがつらいのが伝わってきてとても心配していました。今日久しぶりに会えてとても元気そうなので安心しました」

あるいは、この前話したことのその後を今日はお伝えしなくちゃと思って出向くと、先に当事者のかたの方から

「この前の話、その後何か進展があったような気がします。どうですか」と聞かれたり、会話の途中で言おうとしたことをそのまま先に「〇〇とか？」と良い意味でズバリ言い当てられたり。

マガジン交流会の場では具体的なことはあまりお話ししなかったのですが、

「そういう超常的といえるほど鋭敏、研ぎ澄まされた当事者の方々の感覚についてすごく感心することが最近多いので、寝たきりで意識があるかないかわからないという判断をされがちな当事者の方の中に、わかっているところかそういうすごい感覚を持っておられる方が数多くいるということをもっとアピールできたらと思うのですが、でも読んでオカルトみたいと気味悪がられてもいけないし…。」と正直な気持ちをお伝えしてみました。

そうしたらBさんが、「なんで？そういう話、ぜひ聞きたいですよ。臨死体験とかそういう究極の場を経験した人のことも研究されていますよね。その遷延性意識障害というのは、心肺停止とかになって蘇生した人が今生きておられて、実はいろいろわかっていて思いを伝えようとされているんでしょう。そういう状態の人がするどい感覚を持っておられること、広く知ってもらって当事者の人達が認められるべきだと思いますよ」と言ってくださいました。

他の参加の方たちも、興味ありますと。

そうして大会から戻り、また対話支援で当事者の方とお話すると、ますますその感覚の鋭さを感じるようになり、そしてただ鋭いだけでなく、いつも大切な誰かを案じたり共に喜んだり、共感や温かい思いにあふれていることが、あらためてよくわかるようになりました。

これからは当事者の方々と更に多くの対話の機会を持って、そのお一人おひとりの内なる世界と尊厳ある人生を皆様に知っていただいて交流が進むよう、努力していきます。

Bさん、背中を押してくださりありがとうございました。

■指筆談は究極のリハビリ？！

ある時、当事者のCさんが言われました。

「高木さんに指筆談で介助してもらっている時、話すように自然に書けて、身体が動かないことを一瞬忘れると前に言ったことがあります。最近、こうして会話していると、自分が書いている感覚とか高木さんの言葉に反応して自分の身体が動くとか、そういう手応えを感じるようになりました」

これは大きな気づきです。Cさんご本人にとってはもちろんですが、介助者である私にとってもたいへん重要な「証言」です。

Cさんの言葉を聞いて、Dさんのことを思い出しました。

障害で手が上手く動かせない方のリハビリ器具として、スプリングバランサーというのがあります。細かいテンションを調節できるスプリングに腕を通して吊って浮かせることで、腕を動かす際の負担を軽減して動作をサポートするものですが、車いすに座っていくつかの動作ができるまでになった遷延性意識障害のDさんは、以前リハビリで腕の動きの制御の練習にこのバランサーを使用しておられました。車いすに座ってバランサーを装着し、車いすテーブルに置いた目の前の輪投げの棒に輪を通す練習でした。棒の先から少し低い位置でご家族が輪を手渡し、それを掴んで棒の先端の高さまで輪を持ち上げ輪を棒にかける訓練です。Dさんは自力では輪を持ち上げることができませんが、バランサーを装着するとDさんの腕を上げようとする動作をバランサーが補助して棒の先端の高さまで負荷なく輪を持ち上げることができます。驚くことに、これを繰り返すと、その直後はバランサーを外しても自力で腕を上げて輪を通すことができたのです。それは1度だけ、上手くいっても2度、自力でできる時があったかそのぐらいの短い時間ですが、超短期の脳の記憶かと立ち会っていた専門家は言われましたが、瞬間的ながら身体が動作を覚えていて再現できたように見えたことがありました。

Cさんと指筆談で対話してCさんが自然に書ける手応えを感じた時に、タイミング良く私がCさんの指

先から介助の手を離すことができたなら、バランスを外しても腕を上げることができたDさんのように、もしかしたら瞬間的にでもCさんは指を自分で動かせるのではないだろうか。もし指が動いたら、それは発症前に自然に書いていた動きを指筆談でCさんの身体は思い出し、それを覚えて、介助なしで再現できたことになります。成功すれば指筆談は遷延性意識障害の思いの表出を手助けする手段としてだけでなく、自力で書くという動作を促す究極のリハビリになります！ということは、指筆談のメカニズムの一要素である接触圧センシングによるデバイス、負荷なく操作できるヨミトリ君でも同様の効果が得られると考えられます。そうです、事実、指筆談でしばらく書いた後は、書く前よりヨミトリ君の操作がスムーズにできるという結果が以前出たことがありました。検証と言えるほどの実験をしていますが、ヨミトリ君はディスプレイにどのくらい押せたかの数値が出るので比較は有効です。

こうなると、対話支援をお勧めする際にも、日頃出せない思いをご自分で書いて言葉で伝えることができ、励みや癒しになりますという点に加え、自然に話すように書けることを繰り返すことで身体が実際にその動きを思い出し記憶して、再現することができるようになる、かもしれません、とアピールすることができます。事実、目視では確認できないマイクロムーブでも、当事者Cさんご自身は身体が動いていることを自ら感じられたのですから。

当事者の方と検証実験をやりたいな。できるだけたくさん。ご家族の皆様どうかご協力よろしくお願いします！

また、別の出来事ですが、当事者Dさんは聴覚がとても鋭敏で、これまでも周囲のほんの微かな音に驚いて身体がビクッと反応する時があったのですが、先日指筆談での会話中に私が言ったことにハアーツとものすごく大きく息を吐かれたことがありました。そして「今は、高木さんのお話を聞いてとても驚いて、思わずすごく大きなため息みたいになりました」と説明してくださいました。遷延性意識障害で身体が動かない方々は、可笑しくて笑っているつもりなのに表情筋はピクリともしない、悲しくて、うれしくて泣いているのに涙が一滴も出ない等、本当に様々なもどかしい思いをされています。Dさんは、多分私の失敗談か何かにあきれ程驚かれたということだったと思うのですが、物理的な音とかではなく、人の話の内容に反応して相応の身体の動きが出るというのは、Cさん同様、とても良い兆しだと思います。

対話支援と名付けている活動ですが、本当に私自身の気づき、学びが多いです。できる限り続けていきたいです。

■来年も楽しみです

このマガジン 63 号が公開される頃は、毎年開催される愛知県内の市のボランティア団体と市民の交流イベントや活動発表展に参加して、ヨミトリ君の展示・紹介をしています。学会の年次大会が10月の半ばでしたが、その時ご紹介したヨミトリ君には既にしっかり改良が施され、今はまたすごいことになっています。

ヨミトリ君でAI作曲ができる体験はクリエイティブに楽しみながら自然に「はい」「いいえ」の押し分けの練習ができるとあって、当事者の方々に大好評。ご家族にも音楽の披露があり楽しいと言っていました。「留まるところを知らないヨミトリ君の進化」はもはや定型句になっていますが、なにやらス

ーパーヨミトリ君なるものの噂も流れてきて、一体ヨミトリ君はどうなるのか、どこまでいくのか。ヨミトリ君から絶対目が離せません。

対話支援のご依頼や東海地区遷延性意識障害者と家族の会「ひまわり」の新規会員さんで在宅介護をご希望されている方の、先輩会員さん宅の見学コーディネート等、新たな繋がりが生まれ交流や情報交換の場が育まれる機会のお手伝いはとても勉強になり、そして大きな喜びがあります。

3月には遷延性意識障害当事者のEさんの音楽発表会があります。今回は、ヨミトリ君を操作して電子ドラムの演奏をするという挑戦です。音楽教室の他の生徒さんとのコラボ演奏という企画も出ており、演奏はもちろんのこと衣装をどうするかでも盛り上がり、今からワクワクです。

前号の投稿タイトルにした「失業の危機?!」は、ありがたいことにほんの僅かな期間でした。指筆談のメカニズムに関する新たな研究テーマも芽生えつつあります。諸先生方のご指導を仰ぎつつ、遷延性意識障害・閉じ込め症候群の状態にある当事者の方々・ご家族と連携しながら、これからも実践と研究、そして啓発をがんばっていきたいと思います。

No Promises. Just Possibilities.

確約はないです。でも可能性は常にあります！

あなたがわかっていること伝えたい。

情報を必要としている方、表出しているのにまだ伝わっていないあなたの大切な方に、指筆談とヨミトリ君が届きますように。

ご一緒にしましょ！

<https://www.goisshoshimasho.com/>

ヨミトリ君HP

<http://www.aizyoushien.com/index.php/yomitokun-project/>

東海地区遷延性意識障害者と家族の会「ひまわり」

<https://pvs-himawari.wepage.com/>

<筆者プロフィール>

インドネシア語・英語通訳・翻訳を経て、介助付きコミュニケーション「指筆談ヨミトリ」による意思疎通支援をライフワークとする。「ご一緒にしましょ」代表。ヨミトリ君プロジェクト。東海地区遷延性意識障害者と家族の会「ひまわり」役員。第52回NHK障害福祉賞優秀賞。ヨミトリ君共同考案者。